

あまでつすです

十七世紀ネーデルラントの南部デルフトに生まれ、三十数点の絵を残した光と影の画家ヨハネス・フェルメール展を豊田市美術館で観て来ました。

今から11年前に『恋文』を愛知県美術館で観て以来一度目となるフェルメール展。

つづき

そんな自分を責めるな！おまえはよつ、がんばった。りおんだって、わかってる。」

横三十八センチという小ささにした。たま驚いたものである。手紙を渡して笑み泛かべる

そんな事を考え乍ら嬌めつ眇めつ観た記憶がある。

今回の『地理学者』は縦五十二、横四十五センチの大きさを、窓際で手にコンパスを持ち海図を広げ

地理学者が日本のどてらに似た物を着ているが、

そこに使われている青は高価な顔料ラピスラズリが使われている。デルフトには「デルフト焼」と云われる陶磁器があり、

デルフトブルーとして知られている。この陶磁器の原点は有田焼であった。

フェルメールの絵の裡にもデルフト焼を見る事が出来る。『地理学者』を始め『牛乳を注ぐ女』

『ヴァーギナルの前に立つ女』『ヴァーギナルの前に座る女』等にデルフト焼のタイルが描かれている。

はオランダ・フランドル絵画ルーベンス、プリューゲル、レンブラントが展示されている。今回は貴重なフェルメールの『地理学者』を観ることができ、満喫して帰って来ました。フェルメールの裡で今一番観たい絵がある。

それは映画にもなつた・・・青いターバンの少女が「エッ、何？」と振り返り時間が止まる。そう。真珠の首飾りの少女である。

インターハイのレギュラーとりおんと同じクラスの職場体験で残る寮生は、ごはんを食べて帰って来たので、10時40分くらいだった。今、着いた。」

た。バスで出発する前に、あたしが帰ったと思つたりおんは、一人フェンスの外を向いて、目を真っ赤にして涙だけ流してた。

でこれを我慢して、大人になって行く。成長する。オレもこの1週間、子どもに教わつた。本当に良かったとおもつとるぜ。」

風地蔵新聞

第94号 編集 飛田 美帆 発行 風地蔵 田中 美帆 〒503-0922 岐阜県大垣市馬場町85

台風

原 由里子

7月19日は、朝から雨と風から始まりました。ゆっくりとした速度で日本に旅行中の台風の影響です。ずーっと一日中、暴風と雨ではなく、

話をかけてしまいましたが、ありがたい事に、私が店に向かう時には雨は降っていた物の雨具を使わなくて

レビをつけました。人からも聞いていました。はとでもゆっくりな速度で、日本に上陸する時に、勢力が増すと聞いていました。

くの水が溢れんばかりに水があり、少しぞつととして見て帰つてきた事を思い出しました。

の水がみるみる増えていくのが目に見えてわかつたぞつです。1階にあつた荷物を2階に上げて避難したぞつです。

ていました。納得です。とても流行りとは思えないので。大垣は水の都。昔は10センチ掘れば水が出ると思つた事があります。

ヤフーブログ 毎日更新中 風地蔵徒然日記 http://blogs.yahoo.co.jp/rion5230

新婚記

白石 美帆
(たなかみほ)

剣道部女子合宿編

玉龍旗の夏が来た。福岡のマリンメッセで開催される大きな大会。

りおんは、今回夏休みをとるひまがなく、先生の計らいで、岐阜の高山から、私の住む、福岡への帰省も兼ねて、7泊8日の女子だけ我が家で泊まりながら、試合に行く事になった。

さあ、たいへん。たかおは、りおんと暮らすより早く、いきなり、7人の高校生のお父さんになつてしまった。

その子たちが、きのう、帰って行った。夕方、たかおから電話。

「今から帰るけん。やつぱり、泣いとると思つた！電話がかかってこんやつたけん、ぜつたい、泣いとると思つたもん。すぐ、帰るけん、そこでまっつけ。」

正直なところ、ちょうど半分で、ちゃんやらなきやつてテンプアつたあたしが、人の言葉が、責められてるように聞こえたりして、「朝ごはんの味噌汁の具がない」事を、口実に、夜中3時半に、1時間のプチ家出をした。

結婚して、3カ月、ほとんど時間が狂うことなく、まいにち、汗だくの仕事を終え、家に帰ったら真っ先にあたしのつくったつまみでビールから始まり、途中、お風呂に入って、メイン

に移る頃には、焼酎の水割りでは酔いになり、10時には寝床に入る生活だった。たかおの生活も一変した。

この合宿中は、やつた事のない我慢の連続。いつ切れるかといやいやした。

まず、試合場所のマリンメッセや、練成会の場所に、迎えに来てもらわないと、私が2往復しないとイケないので、困る。それを当たり前かのように言うあたし。

朝は、そうは言つて

「いまま、もしかして止めました？」笑顔

「はい。ナンバーのランプが片方消えてたし、なんか急いでらつしやるのかと思つたら、ゆっくりいかれたりしてたもので。」

「きのう、娘たちが玉龍旗で2回戦突破したんですよ！あした、3回戦なんですけど、1試合目なんで、試合開始が、8時から！その前にアップするでしょ！6時半には着いときたいんで、5時には起こして、ごはん食べさせないと！」

「さあ、たいへん。たかおは、りおんと暮らすより早く、いきなり、7人の高校生のお父さんになつてしまった。」

「いまま、野菜買いにきた。」

「そっか。気をつけて帰つてこいよ。」

「前の車停まりなさい。」

「いいえ。3か月前はそうだったんですけど、あたしが再婚して、太宰府に住みだしたんです。でも、娘は高山で寮生活してて、それで先生が、気を使ってくれて、帰省も兼ねて、女子部員全員うちで預かつ

でも、とめられる理

も仕事なので、私が2往復するから、毎日5時起きで、朝ごはんの支度をするが、これは日ごろからも同じなので、2人分が、9/10人分に増えただけの事で、卵を毎朝10個割り、目玉焼きより卵焼きの方が早い！と気がついたり、しゃげを焼くより、ウィンナーだ！と学習をして、なれたら全く苦にな

「あ、サイフしか持つてきてない。」

「では、念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

「あ、はい。念のため、確認だけさせて下さい。住所と名前を。」

ちよつと立ち話

大橋さん
のを読んで、
あらためて
振り返ると
兄弟の中で
も、父親は
話にも上が
らないし、
思い起こし
てみよう
おもいました。
社長の、リーちゃん
の気持ち、たかお
さんの気持ち、丸ご
と受け止めてほしい
なと思いました。最
後はいつものろけ
すね。

・まだまだこれから
が夏本番ですね。外
でのお仕事大変です
が、家族の笑顔で乗
り切って下さい。私
も「ガリガリくん」
大好きです。「なし」
味がいちばん好き
です。(美紀)

・お盆も早く、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

・お盆もなく、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

・お盆もなく、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

・お盆もなく、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

ありがとう

大橋 美紀

最後の夏。

日本で一番熱く長い
夏でありたかった。
7月9日、高校野球
岐阜大会が開幕した。
しかし7月18日、
3回戦で甲子園への
道は閉ざされてしまっ
た。思い出せば、小
学生の時、クラスメ
イトの男の子が15
人中8人が小学校の
野球少年団だった。
その頃我が子は町の
サッカー少年団で足
の速さを生かし、サッ
カーで活躍していま
した。しかし4年生
になったとき、クラ
スメイトの(野球少
年団)子に、8人じゃ
試合が出来ないから

と息子に入団を進め
ていたみたいでした。
私達夫婦はそんな事
も知らず、このまま
サッカーをやり続け
ていくとばかり思っ
ていました。しかし
ある日の夜、息子が
「野球やるわー」と
言い出した時、私達
はびっくり仰天。何
が何だか・・・どう
して突然言い出した
のかもわからなく、
息子に話を聞いてい
くと、それでなんだ
なあと言いだしたこ
とには納得をしたも
の、野球少年団に入
団することはすぐ
には納得することが
できませんでした。
その日から毎日、私
達に「入りたい。み
んな野球がしたい。」
と言い続けました。

でも「今までやって
きたサッカーとは全
く違うんだよ。野球
はボールを蹴るんじや
なくて、投げるんだ
よ。」と言っても息
子は、「そんなこと
わかってる。」と言
い返してくる。どれ
だけ私達が言っても
息子の気持ちはもう
野球の方に向いてい
ました。私達も息子
の意思の強さに負け
ました。そして入団
を決めた日から、我
が家では、学校から
帰って来てから毎日
キャッチボールが日
課となり、ボールの
投げ方受け方も分
からない、もちろん
ルールもサインもと
にかく皆より3年遅
れている。5年生か
らは試合に出る目標

で、みんなより3倍
以上の練習をしない
といけない。週末は
練習場所である小学
校のグラウンドでコー
チが息子に本当に熱
心に教えてもらい、
また平日は家でバッ
トを振り、ティーバッ
ティング、キャッチ
ボールと練習練習で
した。みるみる野球
を覚え、5年生から
目標であった試合に
も出ることができ、
野球の楽しさも同時
に感じていったのか
もしれません。
私達も上の息子も小
中・高とスポーツを
やっていましたので
二手に分かれ本当に
忙しい13年間です
た。

土・日・祝日は、平
日よりも早く起き、
お盆もなく、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

お盆もなく、今日
で親子でやってきま
した。息子はもう大
学に進み野球をする
ことも、どんな形で
も野球を続けること
は今は望んでないそ
うです。

結婚記念樹とカブトムシ

子供の時に好きだったものは、大人になってもやっぱり好きのままであったりする。小学校の時に夢中だったものは2つ。野球とカブトムシ。40才になった今でも残っている？ものは野球とカブトムシだ(ビールも好きだけど・・・)

ウチの裏には(一応モデルガーデン)では数年前からカブトムシが採れる。切り倒した丸太を「椅子にいいかも」と持って帰り、しばらくしたら腐っていた。何気なく割ってみるとカブトムシの幼虫が！25年振りくらいのご対面。

それから毎年裏庭を掘り起こすと幼虫を見つけることが出来るように。しかしながら、成虫のカブトムシを発見できたことが一度もなかった。カブトムシが大好きな「クヌギの木」を植え、スイカの皮などのトラップをしかけ、

龍蔵と文平を連れて朝晩見に行く。飼育ケースの中には幼虫からかえった成虫は何匹もいるが、木にとまっている成虫を子供たちに何とか見せたい！しかし、いつも空振り・・・

結婚した記念に「シマトネリコ」の苗木を買って、アパートのベランダで育てた。植木屋になってはじめて買った植木だ。沖縄が原産で当時シンボルツリーとして人気があり、独立した今も庭作りにはかかせない植木のひとつ。

家を建てて引っ越して、しばらく庭を作らなかったが、このシマトネリコだけは玄関脇にポツンと植えていた。今では4メートルくらいになり、我が家のシンボルになっている。

自分が居ない昼間、龍蔵が突然「お母さん、この木、カブトムシの匂いがする」「お父さんが樹液があるところに住んでるよ、と言っていた」嫁さんが良く見てみると3匹発見。虫嫌いなのでギャーギャー言いながら何とか採ったそうだ。龍も大喜び。

さんざん毎日探していたのに、こんなに近くにいるとは・・・普通はクヌギとかカシの木にいるはずなので、ノーマークだった。

自分が帰ってから「カブトムシはこうやって採るものだー」と木を揺すったら、ポトッと落ちてきたし、次の日の朝、ポストから新聞を取るため何気に見たら、3匹くらい蜜に集まっている。なんだかんだで2日で20匹くらいゲット。その内10匹くらいは逃がしてあげた。夜時間があると懐中電灯を持って家族全員で観察する。楽しい時間だ。

これから毎年夏になるとカブトムシを見ることが出来ると思う。そして孫の代までも。結婚記念の、そして植木屋人生第一号の植木。カブトムシが住んでいてくれる限り、切られることがないだろう。龍が大人になって、子供に「お父さんが5歳の時にね、この木にね・・・」と是非話してあげてほしい。

庭師 奥田良樹

父を想う

鎌澤 宣子

前回の「大橋さんのことを読んで、ふっと自分の父の事を思い出しました。母の事は、姉妹の間でもよく話題になるのですが、父の事はあまり出てこないな」と思いました。病気がちで入院をしていて事が多かったのと、怒りっぽい人で、すぐ手が出るよくな父だったからか、もしかたせん。母がよく愚痴をこぼしていたのは、「酔っ払って帰りに、お弁当箱がいつもない。どこに振り回して、どこのを思い出すと、私だけか」と言っていた。座っている写真があるのですが、姉達

との事。確かに怖い父でしたが、子供心に物知りの父で、よく歴史が好きで、とく、「大垣の大手門」という喫茶店は昔、大垣城の大手門があった場所だ。また「歩行町(おかちまち)」は戦が始まると、馬の後ろからやりとか持ったついでに行く、歩行組の住んでいたところなんだ。など、色々話してくれたのを思い出します。戦争に行っていた時は、満州の奥地にいたので、現地の人たちと仲良くして馬に乗ったり、バナナをとって食べていた。日本に戻った後、日本に帰ったと実感したとか、また、結婚で入院している時にお見舞いにおまんじゅうをもらって、子供達がそこ

つに1個で、あとは自分が抱え込んで食べていた姿を思い出して、今思うとすごく純粋な人だったんだ。私が生まれる少し前までは、一升瓶を抱えて飲んでいたので、父は、私の記憶にある父は、喘息もあつて、風邪をひくとの奥が、「ヒューヒュー」といついてとでもつらそうな表情の父と、十何年肺気腫という病気で入院している時に、「皆さん知っていますか。アルミのウイスキーを入れた小さな容器なんです。飲んでいたら、隠れて病室で飲んでいたら、くるといって記憶は無く、兄や姉などからしか聞いた事がないから、

あまり怒られた記憶はなく、わがままな人ではあつたと思えます。父の11歳上である姉であるおばさんが、当時名古屋に住んでいた、よく大垣にきて、大量の揚げたてのコロツケをお土産に持ってきてくれたのが、楽しみで、そのおばさんが来る時、父も母もやさしかったです。だからいつも「コロツケのおばちゃん」が来たよ」と、又、そのコロツケがおいしくて、家では人数も多く、家で人数は食卓に上がらなかつたのですが、うれしかったですね。皆さんも何か子どもの頃の食べ物にまつわる思い出ってありませんか？私は今でもコロツケをみると、いつも

父母の笑顔思い出します。又、喘息の発作が出て、苦しそうな父の顔も忘れられませぬ。他の兄弟が苦しんでいる父の背中をさすろうとすると、とてもいやがって、手で払いのけていたし、私でしたが、私がさするとなぜか落ち着いてきて、「楽になつた。」と。姉達とはとても不思議がつて、

「同じようにしてるのに、なんで宣子がさするといいんや。」と言っていました。当の本心である私も不思議でなりませんでした。が、だいたいあとなつて、「さす方向があつて、呼吸のリズムで、落ち着け、落ち着けてさすって、落ち着くんですよ。」と。ぼそつと呟いた父の顔もとても印象的で、このことは姉たちには内緒です。父と私二人だけの秘密です。今、夫の母がけがの手術のため、入院して何かついて、休みのたびに母に振り回されているのですが、父の事を思い出した時に、きつと私に親孝行をさせてくれているんだと、昔から、「親孝行、したい時は親はなし」とよく言われていたのですが、私にはまだ夫の両親がいますので、自分の親に出来なかつた事をさせてもらえら喜びを感じながら、今これを書いていいます。そう思えるようになった自分を誇りに思います。又これからわがままをいいたいと思います。